

博士論文執筆経験談

平成28年3月修了生

元所属：芸術系教育講座 現所属：東京都立橘高等学校主幹教諭 **浅野 恵治**

1. 研究を進めた2つの力——「耐力」と「体力」

論文執筆を前に、それぞれの教室もしくは指導教員から研究方法や論文執筆の作法、学会での振る舞いなど、耳にすることも多いことであろう。ここでは決して教室では語られず、こっそりと諸先輩方から伝授された力について紹介する。

博士課程の院生として、幾度となく研究発表を行った。会場からの反応は、極端な二つであったように思う。一つは、博士課程の学生を独り立ちしていない蛹を守るように優しく丁寧に論じていただくケース。質問の中から研究の着眼点を褒めていただき、至らない点をやんわりと指摘する紳士的な振る舞いである。もういっぽうは、千本ノックよろしく厳しい言葉で嘲罵されるケースである。完全にノックアウト状態の私に、懇親会の席上で追い打ちをかけた先生もいた。その場に同席した先輩が、こっそり「耐力って大事だよ」と論じてくれた。院生生活が長くなると、この「耐力」の重要性を嫌というほど思い知ることになる。競争的研究資金に採用されなかったとき、論文の結果査読がボロボロだったとき、遣る瀬無い思いをグッと堪えて耐えるのである。耐えることによって多くを学び、次へのエネルギーを蓄えることにもつながるのだ。

博士課程の日々は、「体力」がものをいう。他に仕事をしながらの研究活動は、時間との闘いだといえど多くの方が書いている。私も隙間時間を見つけては、調査や研究の整理、雑務をこなした。私の場合は、隙間時間だけではとうてい足りず睡眠時間を削った。博士課程1年の時は、気負いや根柢のない焦りがあって休みを全くとらないまま4か月が経過した。体力には自信があるつもりだったが、身体がパンクしてしまった。本務を持ちながら博士課程に所属する学生にとって、休む力すなわち「体力」を身に付けることは切実な問題である。

2. 執筆環境を整える

一部の企業システムのような堅牢なハードウェアと手厚いバックアップシステムが用意された中で、博士論文を執筆したという院生の存在を私は知らない。私のように隙間の時間を見つけては執筆を続けた院生は、ノートパソコンを持ち歩くだろうし、データの管理に頭を悩ませることだろうと思う。ノートパソコンのハードディスクは、締め切り間際に壊れる。そんなことは都市伝説だと高をくくっていたが、私の身にもその現実降りがかった。冷静に考えてみると、ハードな扱いとなる時期に可動部品が壊れるのは当然のこと

とである。直ぐに記憶装置を交換したが、ハードディスクドライブではなくSSD (Solid state drive) に変更した。可動部品を少なくし、少しでも破損のリスクが低減することを期待してのことである。データのバックアップについても、パソコン本体内部だけでなく外部記憶装置とクラウドサービスを併用した。最も辛いのは、コンピュータが壊れることよりも、書き溜めた執筆データが無くなることである。これを怠ったがために、絶望の悲哀を舐めた院生を私は知っている。

院生の間に、指先を怪我してしまったことがある。キーボードを叩く指先が痛くて、執筆が捗らない日があった。プログラマーを職としている友人に相談したところ、キーボードを替えることを勧められた。それまでコンピュータ本体に付属のキーボードしか使ったことのない私にとって、新たにキーボードを購入する発想は全く無かった。半ば騙されていると思いながら使い始めたキーボードであったが、そのタッチが絶妙で虜になってしまった。気のせいと笑われるかもしれないが、上質な万年筆を使うような心地よさがあり、いつもより筆が進むのである。執筆環境を整えることにより、執筆している自分を快適にしたり、自分を追い込んだりすることも大切だと痛感した。

3. 見えない圧力に煩わされない

博論執筆は、迷いの連続である。大学という学校システムの中にある以上、指導いただく先生方に対して垂直方向の圧力を感じることもしばしばあるだろう。いっぽうで研究者仲間や職場の同僚、院生間など、水平方向への圧力も無視できない。

幸せなことに私は、博士課程に入学してから一度も先生方から垂直方向の圧力を感じたことはない。学部生時代に感じたような、ヒリヒリするような息苦しさは全く無かった。圧力どころか、むしろ信じられないほどの気遣いや、不甲斐ない私に心苦しいまでの支援を頂戴した。教育が贈与と交換を基底として営まれるとするならば、次の世代にもこの幸せを伝えたいと考えている。

私の場合、厄介なのは水平方向への見えない圧力、自主規制に近いような同調圧力だったように思う。アカデミック・ポピュリズムという言葉が存在するか定かでない。他者と異なることを価値とする研究活動においても、マジョリティに対する気遣いに煩わされた。そんな気遣いは、全く不要である。院生でいる間は、私を貫けばいいと今だから言える。